



島貫 陸 著
気象の理
—環境科学へのアプローチ—
東洋館出版社, 1980, B6版,
166頁, 1400円.

(島貫陸様)「気象の理」をおもしろく読ませていただきました。これを手にしてから毎晩寝る前に50ページづつ読みましたが、3晩目のいま、ちょうど読み終えたところです。すばらしい力作です。この出来ばえは、きっと山本義一先生にお見せしたかったにちがいありません。でも、山本先生はこの本が出来上る少し前に亡くなられて残念です。私は高校生のころ山本先生の元の「気象学概論」の初版を読んで興味をおぼえましたが、その後の新版はあれから約30年後の今もお毎年多くでています。「気象の理」はあの本より少く薄く、しかも式を使わないで気象の全分野の理すなわち筋をやさしく、かつ手短かにしかも正確に紹介しています。はしがきに「心をこめて世に送り出した」と書いてありますが、たしかにそう受けとれます。心をこめて書かれた本には読者の心を感動させるものがあります。「気象の理」はこんご、名著「気象学概論」と対して本だなに並べておきます。そうして『「気象の理」ではこの問題は どう説明してあったのかな』と思うようなときに参考にさせていただきますたく思っております。

こういう本は一朝一夕には出来上るものではなく、おそらく島貫さんがつねひごろ気象のいろいろな問題を「如何にしてうまく、より正確に説明すべきか」を相当考えて、研究していたものの集積のように思います。この本は学校の理科の指導法を研究しておられる先生用だけでなく「誰が読んでもよい一般向けの入門書として書かれた」としてありますが、ほんとうにそのとおりです。気象をより正しく理解してもらうために、いろいろな方にご推薦申し上げたいと思います。

私が一読して感心したところやおもしろかった点は次のようなものでした。(1) 理科教育における気象の位置づけについての独自の考え方。(2) 転向力の性質を実感として生徒に理解させる方法として、厚紙を手を持ってゆっくり反時計回りに回しながらその上に鉛筆で線を引いてみようというものがある。私も、もちろん読みながらやってみました。(3) 傾度風における力のつり

合いを図で示し、ある程度以上の気圧傾度をもつ高気圧は存在しないことを説明したのち、気圧傾度がないにもかかわらず吹く風も存在することを同図で教えている。

(4) 気温の日変化と年変化の形が違うことを日射量の日変化と年変化の形で説明している。(5) 断熱変化の説明で、断熱膨張の考えを持ち込まずに、エネルギーの形態の変化だけから説明したのは新工夫である。(6) 対流や湿度変化のメカニズムをかなりつっこんで議論している。(7) 粗度 10 cm と 0.01 cm の平坦地では高度 10 m のところの風速が同じでも、高さ 1 m のところの人間の感じる風速は 2 倍もちがうと図で説明している。(8) 海陸の温度差の原因として多くの教科書では海水の比熱をあげているが、そうではなくて海は一時に加熱される層が厚いことが主であると説明している。私もふだんからそう説明すべきだと思っていたところです。(9) 台風の進行方向の右側は風速が強いことを簡単な方法で説明している。(10) 3 時間毎の気温鉛直分布の実測データからそれぞれ特徴のある 3 種類の図をつくり、うまく解説している。

そのほか、いろいろな説明に新しい試みが多く見られます。そして最後のほうに(11) 確率予報で、確率 10% といえばそれは起こらないとたく世間では思っているが、台風が直撃する確率が 10% あるときに山や海に行くことは無謀であると、確率についての十分な理解を望んでいる。(12) また、大気汚染制御において、健康状態のよくない人にとってはきれいな空気は何にも代え難い宝であるが、まったく病気を知らない人は、ある程度の汚染よりも経済活動を優先して考えるであろう。たばこの例をあげて大気汚染をどうすべきかは人間の全知全能を結集して考える大切なことであると訴えている。この本をさーっと読んだため、ただ 2, 3 理解しにくいところもありましたが、全般にたいへん変みやすかったのです。

追伸 こまかな点ですが、少しばかりミスに気づきました。下の横線のように訂正なさったらと思います。(1) 17 頁: 三杯風速計でも 発電式 のもあるようです。(2) 63 頁: 太陽定数の定義は 地球・太陽間の平均距離における……(3) 113 頁の 2 行目: 南極大陸の周辺部 が低圧部。

(近藤純正)